

はじめに

『ヨーロッパとは何か』

ヨーロッパ研究に名著と呼ばれる書物は少なくない。

岩波新書として出された増田四郎『ヨーロッパとは何か』

(一九六七年)もまた、多くの読者に感銘を与え続ける名著の一冊ではないだろうか。

五〇年以上前に刊行された同著だが、いまなお版を重ね、ヨーロッパ理解を得たい読者に多くの指針を与えている。

このハンディな書物が読む者に深い感銘をのこす魅力とは何だろう。

著者の増田四郎(一九〇八～一九九七年)は、あるときは場所と時代に沈潜し、史料の克明な解読にもとづく歴史学の論文を著した。

またあるときは、時代の曲がり角となった期機(モーメント)に照準を合わせ、社会の変容を大胆かつ的確に掴み出

し、「変化の絵」を周到に描いてみせた西洋経済史の泰斗だった。

『ヨーロッパとは何か』は、いわば著者の研究人生の精華のひとつとして、魅力ある叙述とともに大胆に「ヨーロッパ世界の本質」を掴み、雄大な「ヨーロッパ史の風景」を描き出していた。

歴史的見地からする「ヨーロッパ」の広がり、その空間的広がりを「ヨーロッパ」たらしめてきた文化的基盤、そして、それぞれの国家に分岐し、現代世界を構成するに至った各国(地域)の個性。

この書物は、それらの主題を大胆に、また色彩豊かに素描してみせたのである。

ヨーロッパの俯瞰図(パノラマ)を示しながら、この社会の本質を掴み出した快作だった。

この書物のメッセージのひとつに、現代ヨーロッパの現状を、その由来に遡って構造的に理解すべきとする方法態度があった。

現代のヨーロッパ各国は、いうまでもなく「近代」の産物である。

近代以前には、もとより近代とは違った国家形象があり、また違った国家観、社会観があった。

この書物は、前近代における事態を、それとして、つまり近代からの目線に依らない客観的な視線によって識るべき、というメッセージを伝えていた。そのうえで、前近代から近代への転生を理解しながらその機を認識したい、という姿勢に貫かれていた。

同著は、説得的に「ヨーロッパ」の広がりと本質を伝えて、比類ない視座を示していた。

ヨーロッパ史の常道

わが国にも、もとより多くの「ヨーロッパ史」に関する研究書、概説書がある。

「イギリス史」「ドイツ史」「フランス史」「イタリア史」「スペイン史」等々。

その多くは、各国の近現代に照準を合わせ、それぞれの国の誕生から生長を語り、分析してきた。

それらの叙述は、各地域に現存する各国を主題の中心に置き、地理的空間(国土)を基本的枠組みとする。

そこに生きる者たちにとっては、いわば当然のことであり、その淵源への旅こそが歴史学の常道とされた。

一〇〇年前、五〇〇年前の国家のかたち、社会のあり方が現代と違うことは、誰もが察知できるであろう。

社会と国家は、時間の経過とともに変容する。

ヨーロッパ史の基本は、こうして現代人が生きる国家と社会の現在を紡ぎ出した源流への旅の様相を呈していたのである。

現在そこここに存在する各々の国家・社会は、いつ始まったのか。

今日までの来歴をより深く知ることは、私たち市民の一人ひとりにとって、またこれからの世界を創り出す子供世代にとって、必要な学習事項といってもよい。

この方法態度は、前近代つまり「中世」にも準用されてきた。

すなわち、中世史の多くも、それぞれの近代国家を育んだ揺盤としての「中世イギリス」「中世ドイツ」といった各国単位で事態を観察する姿勢が、これまでの標準形となってきた。

「ヨーロッパ史」は、いわば国民国家を叙述の基本単位としてきたのである。

他方、「古代ギリシア史」「古代ローマ史」もまた、「ヨーロッパ史」研究の重要な一環として営まれてきた。

ヨーロッパ史研究におけるこの編成は、近現代にかたち作られた各国の枠組みを超えた、いわば別の原理で営まれた国家・社会への考察を学習者に促す意味をもっていた。

また、近現代社会を駆動するさまざまな価値や規範（自由、市民等の実体機念）が「古代社会」に胚脂されていた、という想定によって、より積極的な意味づけが含意されていたようにも見える。

ルネサンス以降のヨーロッパ社会は、キリスト教的に緊縛された社会からの脱却という文脈のもとで、前キリスト教社会であった古代ギリシア・ローマ社会に積極的な意味を与えていたからである。

各国史という編成

私が歴史研究の入り口に立ったとき(一九八〇年代)、眼前に広がっていたヨーロッパ史研究の見取り図は、おおよそ以上のように理解されたものだった。

特に「イギリス史」「ドイツ史」「フランス史」では、ヨーロッパ学界ばかりでなく日本の学界でも、重厚かつ重要な研究書が多く生まれていた。

私が属した経済学部の中なかでも、このヨーロッパ三国の歴史は重点的に分析され、「日本史」を含めた比較経済史という視座の中なかで注目すべき成果を豊かに産み出していた。

各大学で営まれたヨーロッパ史研究は、むしろこの西欧三カ国を主要な研究対象にしていたといえようか。

この制度上の傾向性は、本書でも改めて注目したい観点のひとつと考えている。

ヨーロッパ圏におけるその他地域が研究される場合であっても、研究単位がもっぱら各国別であったことも、やはり特徴的といわなければならない。

例えば「東欧」と呼ばれる地域の研究がある。

この東ヨーロッパ地域の歴史研究も、また「ロシア史」「ポーランド史」「チェコ史」「ハンガリー史」「ユーゴスラビア史」「ルーマニア史」「ブルガリア史」「ウクライナ史」と続き、「近代ギリシア史」をも東欧史に含めて営まれてきたものだった。

各国史単位でのこのヨーロッパ史研究の作法がいつ始まり、定着していったのかについては、別の確認作業が必要だろう。

ただそれは、各国が存在していなければならないのであるから、一九世紀のいわゆるナショナリズムの高揚と、その結果としての各国の独立ないし成立以降のことであったことは、ここでまず確認しておこう。

超域と境域

他方、ヨーロッパ史研究の文脈で、二〇世紀の後半はいくつかの新しい機運が台頭した時代であった。

現在の EU(ヨーロッパ連合)に向かっていった「統合」の機運は、各国単位での歴史記述に加えて「新たな歴史認識の枠組み」を要請している。

他方、各国を構成するそれぞれの地域の個性を切り出す姿勢も次第に高まり、いまや多くの研究者に地域史の視点は不可なものとなってもいる。

あるいは、国家と国家の「境域」へのまなざしが重視されてもきた。

境域を構成する諸要素を構造的に解明しようとする研究関心も台頭している。

つまり、ナショナルではなくローカル、あるいはまたナショナルのせめぎ合うボーダーへの関心や、トランスナショナルな人・モノ・情報の動きに対するまなざしが、人びとに共有されているのである。

既存の各国史の観察枠組みは、この四〇年ほどのあいだに揺り動かされ、あるいは融解し、再編成されている、といってよいのかもしれない。

現実の歴史がもたらした歴史認識枠の揺れを観察すると、隔世の感を禁じえない。

各国史とヨーロッパ史

ともあれ、ヨーロッパ史といえば、長いあいだ各国の政治、経済、社会の展開が前提されてきた。

そして、ヨーロッパ世界の歴史事実を検討素材として「古代史」「中世史」「近代史」「現代史」のメルクマールを切り出してきた。

また、そのような時代区分を前提として、「近代」を遡及的に適用し、「中世以来の国民国家史」とその「近代化」過程が解き明かされてきたといつてよい。各国が、自己完結的な単位であり、分析対象として措定されてきたのである。このヨーロッパ史叙述の作法は、それ自体が「近代」の産物だった。

本書は、近代にかたち作られたこのヨーロッパ史のあり方を見据えながら、「ヨーロッパとは何か」について私の専門領域の視座から考えてみた試論である。

本書は、いわば「ヨーロッパ史」の作法、あるいは「ヨーロッパ史」を描く上で当然とされてきた構図について考え、他のありうる視座について検討を目指している

古代か中世か

私は「古代史」および「中世史」を主なフィールドとして歴史社会の考察をしてきた。

西暦でいえば四世紀から一世紀頃までの「中世ヨーロッパ」の社会経済構造分析に関心を寄せ、西欧中世国家との比較において、特に地中海の東半分が存在したビザンツ帝国社会の特質を考察することを中心的課題としてきた。

世界史の教科書は、古代の地中海社会は、その最後の国家であるローマ帝国が五世紀に没落ないし消滅し、五世紀から六世紀には「中世」が始まる、と説いていた。

しかし、長らくこの古代から中世の時代を考察してきて、当時、自らを「古代人」「中世人」と表現する者は、管見のかぎりいない。

つまり、私たちに通用する時間と空間を区切る用語法、あるいは方法態度は、何より近代ないし現代の作法といわなければならない。

当時の東地中海地域の人びとに注目していえば、彼らはどのような存在として自らを認識していたのだろうか。

この場合、歴史学が考究すべきは、この自己了解の中身を、当時の文脈、同時代の地理的世界観のなかで構造的に切り出すことになるのだろう。

汎ヨーロッパという考え方

一九世紀に「国民国家」が基本単位となって、その主役としての「市民」が政治の舵取りをするようになると、「国民国家史」は政治的意図を含んで、歴史学の常道となった。しかし、ヨーロッパの長い歴史的歩みは、もとより「国民国家史」と一致しない。

「国民」と名付けられた実体と概念が、いつどのようなかたちで形成されたのか。

また「国民国家」という観念が、いついかなる契機で生成され、現実のものとなっていったのか。

そのような問いが、ヨーロッパ史のなかでの大問題として扱われることは、驚くほど少なかった。

もっとも、わが国でも例えば前述の増田四郎「ヨーロッパとは何か」や、また渡辺金一『中世ローマ帝国』は、かかる歴史の真実を真摯に見つめる慧眼の書であった。

それらは、ヨーロッパ世界の全体を展望して、国民国家史では見えてこない本来のヨーロッパ像を示してきた。

ヨーロッパの大きな律動のなかに、一九世紀以来の各国別の歩みをも見据えて、有益な示唆を与えてきた。

そして、「事件」や「出来事」に関心を集中させることなく、人物や出来事の舞

台となった社会の構造にまで掘り下げて検討することの重要性を説き、国民国家に結晶していった各地域の個性や特質をも説いていた。

各国史でない「ヨーロッパ史」や「地域史」という視座は、二一世紀の今日、アクチュアルな意味を含んで重要である。例えば前述のように、EUの生成・発展は、各国単位の歴史観を超えたかたちで政治・経済活動を考えるべきことを前提としていた。

それは、第一次世界大戦後のヨーロッパで、各国間の経済的・政治的競争の購映後に、その反省を含んで新しい枠組みとして歩みを始めたのだった。

ヨーロッパの長い歴史を見ると、汎ヨーロッパ的規模で行われた事象が間歌的に見られることに気づく。

例えば、節目ごとに現れる「大帝」Magnus と称される偉大な帝王の事績がそれである。

それらの事象を検討すると、「近代」や「国民国家史」とはまったく異質な原理が伏在していたことに気づかされる。ヨーロッパ史は、この文化的伏流水がいわば間歌的に噴出したとき動いた、とあってよい。

本書は、ヨーロッパ社会の歴史を基底的に動かしてきたこの伏流水にも触れながら、汎ヨーロッパ的規模で律動した「ヨーロッパ史」を今日的視点から展望したいと思う。

それは、一九世紀以来の国民国家史の黄昏期ともいえる現在を、汎ヨーロッパ史の文脈のなかに位置づけることにもなるはずである。

ヨーロッパ世界が本来もっていた姿を素描し、回復されつつある「ヨーロッパ的視点」と同世界の行方について、皆さんとともに考える一助となれば幸いである。